＜報告・記録＞

磯崎新の建築の世界

大久保　裕文
東亜大学 芸術学部 アート・デザイン学科
ok-hiro-ok@toua-u.ac.jp

《要　旨》
本稿は，今年（2023 年）の 10 月に山口県美祢市で開催された第 8 回 日・中・韓 国際交流美術展のセミナーで , 筆者が「磯崎新の建築の世界」と題して行った口頭発表を元に大幅な加筆修正を加え，論文の体裁に改めたものである。建築家，磯崎新の建築設計の学びや建築デザイン史での位置づけを踏まえ，氏が設計したいくつかの建築作品の鑑賞の観点と特徴について取りまとめた。

キーワード : 磯崎新，筑波研究学園都市，つくばセンタービル，都市デザイン

1. はじめに

世界的に著名な現代建築デザイン界の旗手で建築家の磯崎新が，昨年（2022 年 12 月 28 日），91 才で亡くなった。常に話題性のある建築作品の創出や多くの書籍の執筆に加え，海外での国際建築コンペの審査員等を通して広く知られた建築家である。他方，今年（2023 年 10 月 18 日及び 19 日），東亜大学・秋吉台国際芸術村共同企画として第 8 回 日・中・韓 国際交流美術展が，山口県美祢市秋吉町で開催され，初日にセミナーが行われた。会場となった秋吉台国際芸術村の施設は，1998 年に開館し，その施設の設計監理を行ったのが，磯崎新である。

50 年以上も前，筆者は建築学科の学生で，磯崎は 30 代後半の助教授として建築論の講義を担当 (1) していたが，既に建築雑誌等を通して磯崎が設計した作品 (2) や建築と都市に関わる書籍 (3) を著し，氏の活動は広く知られていた。

筆者は，建築学科卒業後，都市計画コンサルタント事務所に在籍 (4) し，数年にわたって国家プロジェクトである筑波研究学園都市の中心市街地の整備に関わるいくつかの業務に従事していた。このうちの一つに，市街地中心部に筑波研究学園都市の顔となる「つくばセンタービル」（当時の名称は「学園センタービル」）の計画策定業務があった。様々な計画・設計与件設定後，この施設の設計コンペが行われ，複数案の中から磯崎案が選ばれた。その後，1 年程にわたって磯崎新アトリエと設計内容に関わる検討を重ね，それを通して磯崎の設計プロセスを垣間見る機会を得た。このようなことから，日・中・韓 国際交流美術展のセミナーで「磯崎新の建築の世界」と題した卓話を依頼されたのが本稿成立の経緯である。

本稿は，筆者が業務として関わった筑波研究学園都市の「つくばセンタービル」の計画立案過程と磯崎建築が生まれる背景となった近・現代建築デザイン史等を踏まえ，北九州市に所在する磯崎作品等の分析を通して，その建築思想の理解の一助となることを目的としている。

以下，国際交流美術展のセミナーの内容を元に本稿の基本的なテーマを列記すると，-1 筆者が関わった「つくばセンタービル」計画の立案過程，-2 磯崎作品を生み出した背景となる近・

現代建築デザイン史上の潮流，-3 磯崎設計の建築作品鑑賞の基本的な観点，である。

2. 筆者が関わった「つくばセンタービル」計画の立案過程

日本の科学技術の学術研究の核となる筑波研究学園都市は，東京から北東約 60㎞にあり，地区の面積は約 2,700ha で，東西 6㎞，南北 18㎞に及び，その都市建設は，国家プロジェクトである。筑波研究学園都市は，1968 年の閣議決定後，1970 年の「筑波研究学園都市建設法」を根拠法として研究学園都市を筑波地区に建設することとなり，「研究学園地区」と「周辺開発地区」に区分し，整備が進められた。

1970 年以降，筑波研究学園都市において土地利用計画，新交通システム計画，新都市施設計画（共同溝，CATV，地域冷暖房等），周辺開発計画，都市経営計画，景観計画，中心市街地整備計画等，各種の調査と計画が進められた。筆者が関わったのは，景観計画と中心市街地整備計画である。このうち中心市街地整備計画は，南北約 2.3㎞，東西約 250 m～ 450 m の概ね 90ha の中心市街地を対象に，主にその中核となる中央 3 ブロックの事業成立の具体化の立案であった。この 3 つのブロックのうちの中央ブロック（東西南北約 180 m× 270 m）に地域住民利用施設，研究学園都市の情報案内施設，国際レベルの音楽ホール，ホテル，商業施設等を整備する必要性から，複合施設としてオルタナティブ案（複数の代替案）の検討が行われた。高度な専門性が要求されるような都市デザインに対し，国から委託された外部の都市計画コンサルタント [5] が，中心市街地の整備計画と共に中核となる「つくばセンタービル」構想の立案検討を行った。

具体的には，1976 年の第 1 次「筑波研究学園都市の中心市街地の整備に関する調査報告書」（国土庁・日本住宅公団）策定以降，1981 年の第 4 次報告書策定まで [6]，中心市街地の整備に関する調査と計画立案の検討である。筆者は，この一連の計画書作成の作業担当として参加した。複合施設となる「つくばセンタービル」の必要性と役割，各種収容施設の規模算定，施設の空間構成，都市形成支援方策等の計画要件立案の後，これらを与件として 1978 年にコンペ [7] が実施された。

コンペは，プロポーザルコンペ [8] として日本を代表する複数社の設計事務所が指名され，設計案提出の後，非公開の設計者説明会の結果，磯崎案が選ばれた。その際，筆者は磯崎の提案説明を聞きながら議事録作成を担当した。

磯崎案が特定されると，その後，筆者が所属するコンサルタント会社は，業務委託者の国の立場で，基本設計策定へ向けて磯崎新アトリエとの定期的な設計調整会議 [9] に参加し，実施レベルへ向けての検討を重ねた。コンペの実施から 4 年後「つくばセンタービル」は，インフォメーションセンター，コンサートホール，ホテル，レストラン，店舗，ショッピングモール，フォーラム（屋外広場）等を有する延べ床面積約 3.3 万㎡，当時の建設費 100 億円を越える複合施設として竣工した。

3. 磯崎作品を生み出した背景となる近・現代建築デザイン史上の潮流

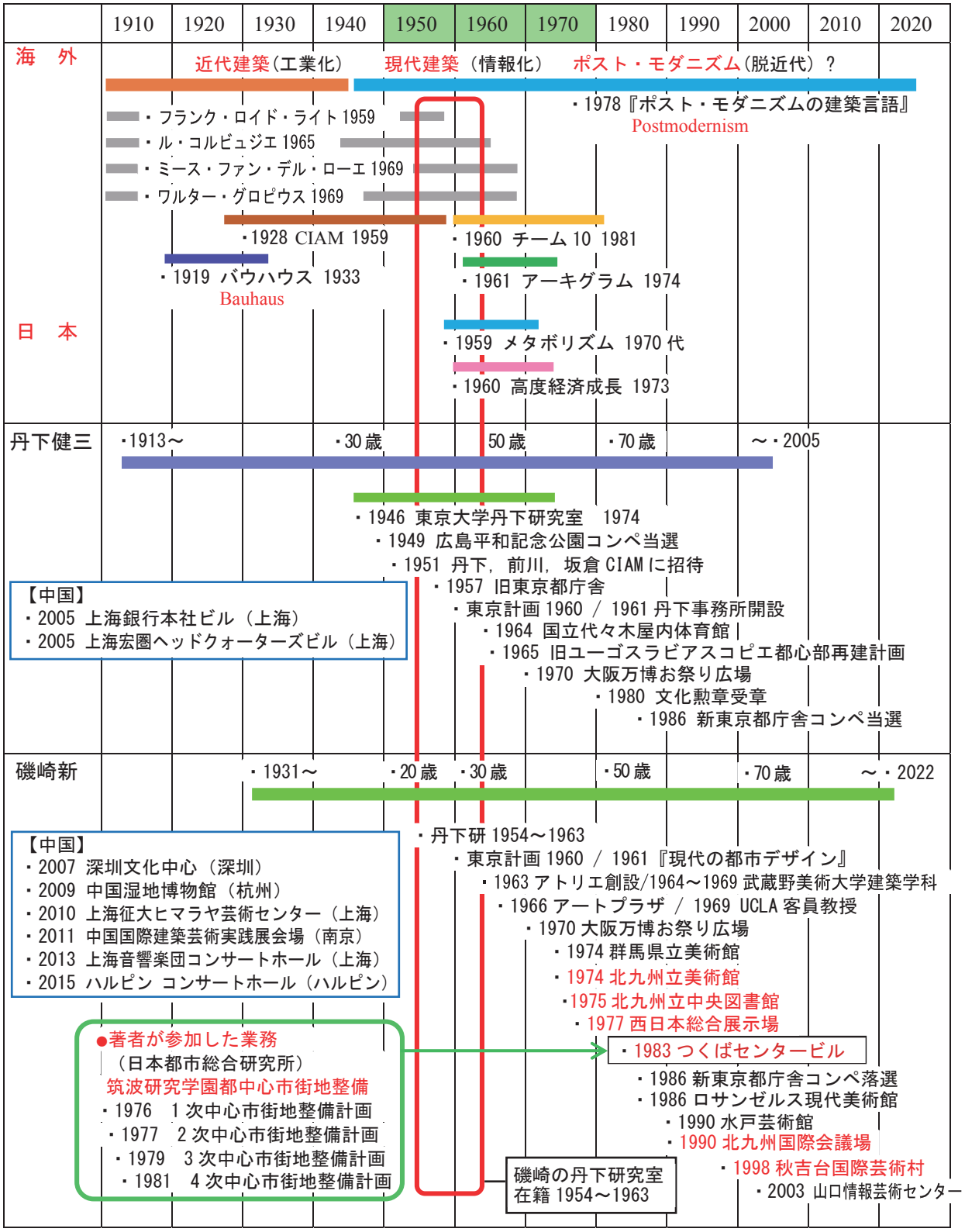
磯崎建築の本質は，戦前から現代にかけて活躍した建築家の丹下健三の存在について触れずには語れない。次頁の表（「磯崎新の時代背景と主な設計作品」）に示すように，近代建築が機能性と合理性の理念を以って設計され，技術力により建設されていく時代にあって，丹下は，その時代と未来を内包させる思想性の強い建築のデザインと都市デザイン（都市設計）の思想を展開し，多くの仕事をした。

①丹下健三の丹下研究室

日本では，モダニズム建築（狭義の近代建築）[10] が台頭していた 1950 年代に，丹下は建築と都市との関りを都市空間の中で位置づけて実際に都市デザインを行った。「広島平和記念公園」のコンペ（1949 年）では，敷地を超えた都市の空間軸を提案し，その都市デザインの思想は海外でも広く知られることとなった [11]。

丹下研究室では，工業化に代表される近代か

表　磯崎新の時代背景と主な設計作品　　作成：大久保裕文



ら情報化へ向かう現代に適合した建築と都市デザインの実践を行うと共に，それらを通して多くの実務家を育てた。代表的な作品として戦後の平和の象徴性を付与した前記の「広島平和記念公園」，明確な機能を表現した1957年竣工の「旧東京都庁舎」や首都機能が拡大化するマンモス都市東京の未来構想を提案した東京湾上の「東京計画1960」，吊り屋根構造による新たな造形表現を持つ1964年竣工の「国立代々木屋内体育館」。スコピエ地震の再建コンペ提案の「スコピエ都心部再建計画（現，北マケドニア，旧ユーゴスラビア）」。この他，「諸外国の多くの都市デザイン」や1990年竣工の「新東京都庁舎」等が挙げられる。

②丹下研究室で学び，歴史に学ぶ

磯崎は，年齢的には20代半ばから30代半ばまで，年代的には1950年代半ばから1960年代半ばまで，丹下研究室で建築と都市デザインの仕事に従事する。20代半ばは，モダニズム建築の興隆期であった。この時期は近代建築の巨匠のライト，コルビュジエ，ミース，グロピウス[12]が，近代建築を可能にした新たな素材の鉄とコンクリートとガラスを駆使した作品を発表し，若い世代は，海外の建築作品に刺激を受けていた。他方，丹下からは，日本の現代建築のありようと計画理論の立案方法を学び，丹下研究室での海外の仕事を通して建築設計を体験した時期であった。この丹下研究室時代（1954年～1963年）の後半期以降は，グロピウスやコルビュジエらの巨匠の時代も過ぎ，海外の若い世代が様々な建築運動を始めていた。

磯崎も外国の建築雑誌等を通して，それらの運動を知ることになる。特に，CIAM（シアム近代建築国際会議）からチーム10（チーム・テン）への世代交替と新たな建築表現で発信するアーキグラムの活動が広く知られるようになる。これらの活動に呼応するように日本のメタボリズムグループ[13]との交流は，丹下の計画論とは異なり，磯崎にとって時代に敏感なアーティスト志向の醸成に資することになる[14]。

この時期，1961年に建築雑誌の『建築文化』に発表した「都市のデザイン」は，建築と都市デザインに係わる仲間たちと歴史的な都市のパターン化について論じた論考で，都市形態が持つ同類性についての磯崎のパターン認識は，この仲間たちとの論議や様々な情報収集を通して育成された。特に，高度経済成長期（1960年～1973年）の日本と当時の海外は，建築史の上では建築思想の新旧交替の激動期であった。やがて30代後半頃から磯崎は，アメリカやヨーロッパの建築家仲間との交流を始める。その一方で，1964年から1969年まで武蔵野美術大学の建築学科の助教授として建築論の講義を持ち，1969年からUCLA（カリフォルニア大学ロスアンゼルス校）の客員教授を務める。これを機に始まったアーキグラムのピーター・クック[15]やロン・ヘロンらとの交流は，建築，アート，音楽等の幅広い人脈づくりに加え，若い頃からのアバンギャルド（前衛）な趣向，建築アーティストとしての感性をさらに磨くことになる。こうした海外の大学からの講義依頼や設計作品と著作によって，磯崎の存在は，建築やアートの世界で広く知られるようになり，後の作品群となって現れる。

丹下が，モダニズム建築以降の現代建築と都市デザインを計画論によって官製の作品を創ったのに対し，元々アーティスト感覚の強い磯崎は，官製の都市デザインを離れ，アーティスティックな建築造形の実作と博学で豊富な実体験をベースに時代に敏感な著作によって世界に知られる建築家となった。

4. 磯崎設計の建築作品鑑賞の基本的な観点

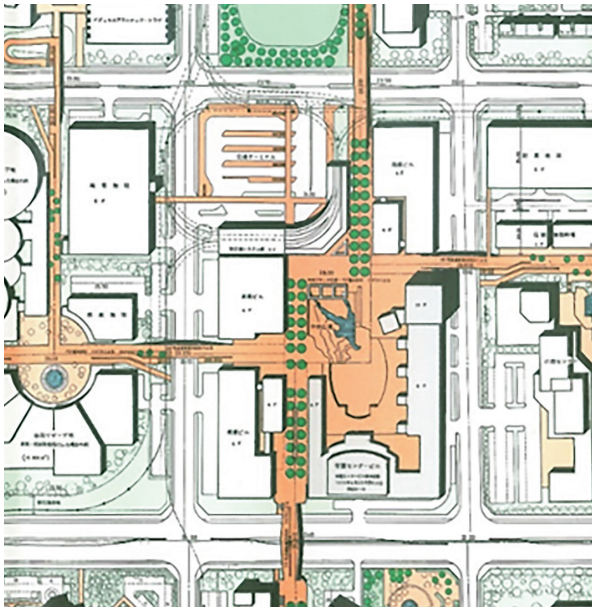
磯崎は，丹下研究室時代の明確な計画論の学びと多様な交流経験を積み重ねながら，アーティスティックな感性を持つ独自の作品を生み出した。その原動力は，先人たちが積み重ねた歴史からの多くの学びと多様な創意にある。以下，都市の風景となった磯崎作品鑑賞の基本的な観点について述べる。

①「つくばセンタービル」（1978年のコンペ当選作品　1983年竣工）

磯崎の代表作の一つで，存在感のあるファサ

つくばセンタービル 1983 年竣工（1990 年筆者撮影）

ード（建物の顔）と無機質な石と金属パネルとタイルの多用によって歴史的意匠のパターンを組み込んで設計した作品。1979 年 3 月 2 日に日本住宅公団の本社会議室で行われた設計者説明会 (16) において磯崎は，3 タイプの模型を提出した。A：アンフィシアタータイプ（半円形階段型），B：ギャラリアタイプ（回廊型），C：フォーラムタイプ（広場型）である。



筑波研学都市中心市街地整備計画図 中央ブロック（部分）1979 年（作図は筆者 日本都市総合研究所）

磯崎の説明では，建物は幹線道路の車のスピード感に合うファサードスケールとペデストリアンデッキ（歩行者専用路）の人のスケールを持ち，城壁のような外壁と広場を囲む内側の表情の違いを明確に区分し，街区は象徴性を持たせるデザインの必要性を語った。

加えて，建物の構えと造形のイメージ，幹線道路の土浦学園線（幅員 34 m）とペデストリアンデッキとの高低差約 5 mの機能的な処理を説明した。最終確定案は，C タイプの広場を囲む案で，その後，基本設計へと移行した。この複合施設は，後年，ポスト・モダニズム建築 (17) の代表例として紹介されることになる。

②「秋吉台国際芸術村」（1998 年）

秋吉台国際芸術村　1998 年竣工
（秋吉台国際芸術村 HP より）

磯崎の 60 代後半の作品である。鬱蒼とした緑の樹林地に建つ南面配置の建築群で，南からのアプローチに沿った宿泊棟と 100 mほど離れて北側に建つ本館棟から構成されている。この施設の設計中に磯崎の講演会が行われ，設計意図について説明している (18)。磯崎の設計スタイルは，多くの著書で述べているように建築の構想段階においてドラマチックで絵画的なストーリーを組み立て，イメージを脚色し，設計の技法によって実作に当たる特徴がある。ここでも，この建築群の基本配置は，中国の風水の考えを援用し，それぞれの建築空間は，古代から現代に至る絵画，音楽，演劇までの芸術論を披歴し，これらを踏まえて設計したことを講演会で語っている。

それに対し，「つくばセンタービル」の設計者説明会で磯崎がとった方法は，明確な建築計画論を基調とした都市景観や建物の造形，建物の性格規定，空間機能の役割やゾーニング（空間の性格区分），各種の動線機能，建物の素材感による表情づくり等，建築家が有すべき計画論を以って，極めて分かり易く組み立てられていた。このような計画論を持つ建築家の立場か

ら国際芸術村の建築群を見直すと，自然地にある建築物の段階的な景観スケールのあり方を基本テーマとしている，と見ることができる。建築群へのアプローチの道の脇には，2 階建て 8 棟の宿泊棟が，軸性を持つズレの配置によりヒューマンスケールを持つ近景として親しく建ち並び，その奥にはレストラン等が建つ。道なりに緩やかな坂道を登ると，やがて 100 メートほども先の中景に建つホールや研修室を持つ本館棟の大きな構えが来訪者を迎え入れる。その背後の遠景景観となる緑樹と，更に大きな山の頂に連なる軸性の景観ストーリーは，段階的で連続性のある建築群の配置と造形によって創られている。磯崎が講演会のテーマとした「地方都市からの景観創造」とは，人里離れた地の新たな風景づくりとして結実している。

③北九州市の建築

-1「北九州市立美術館」（1974 年）

北九州市立美術館 1974 年竣工（北九州市 HP より）

建物は，丘の上に立地している。水平方向の低層部とその上の真北に突出する 2 本の巨大なキャンチレバー（片持ち構造）の構成は，巨大な積み木のようである。積み木の造形は，ランドマークとなり，正面からのアプローチの構成は，神殿風の構えを持つ。大きなキャンチレバーのスケールを緩衝させるため，正方形外装材の目地割は，効果的である。建物へのアプローチの引き（離れた場所からの見え方）の空間のバランスと積み木の造形は，新たな風景を創る美術館の存在を存分に示している。

-2「北九州市立中央図書館」（1975 年）

北九州市立中央図書館　1975 年竣工
（北九州市 HP より）

緑青色の銅板葺きボールト屋根（円形屋根）が創る曲がりくねる造形は，公園内の木々の緑，小倉城天守閣や北九州市役所展望室からの俯瞰を想定した特徴的な建物形状を有している。広幅員の長い階段のアプローチは緩やかで，図書館への誘いを暗示させ，このお迎えの空間のスケールは心地良い。プレキャスコンクリート（工場製品）が造るボールト屋根は，そのまま都市の景観となり，建物内部の円形天井は大きな図書空間となって，造形のシンプルさは都市と建築の内外二重の個性を創出している。

-3「西日本総合展示場」（1977 年）

西日本総合展示場　1977 年竣工（筆者撮影）

建物の立地場所は，ＪＲ新幹線小倉駅から 500 m程北の海側である。展示機能の最大の要件は，柱のない大空間の確保である。このため磯崎は，建物の南側と北側に 8 本ずつの斜張構

造の柱を立て，ワイヤーで屋根を吊り，スパン約 50 m の無柱空間とした。この構造の採用に先だって，海外の斜張橋や吊り構造の建物の事例を検討し，構造的なアプローチから設計を行った。ダイナミックで躍動的な緊張感のある斜張構造の建物は，海に浮かぶ船の帆柱をイメージさせる。展示場建物の用途から大空間確保の必須構造と海辺近くに立地する場所性のイメージを具現化した建物である。

-4「北九州国際会議場」（1990 年）

北九州国際会議場 1990 年竣工（筆者撮影）

この建物は，JR 新幹線小倉駅の北側約 500 m にあり，道路を挟んで西側に建つ前記の「西日本総合展示場」の東側に位置している。JR 新幹線からの見え掛かり，海際に隣接する敷地，将来立地が想定される高度都市機能集積施設や数年後に開業が予定されている高層直方体形状のホテル等を見越して設計を行っている。

北九州国際会議場 エントランスコート
1990 年竣工（筆者撮影）

都市の遠景景観は，JR 新幹線と海からの眺めに対して異形の造形と色彩の使用で表現し，建物へのアプローチは，来訪者を受け入れるゲートを持つ。ここを通ると波型屋根と壁面構成による書き割り [19] 風舞台のドラマチックでヒューマンスケールを持つコート状（囲み型）の空間がある。磯崎のアーティストとしての感性を十分に発揮した造形の豊かな建物である。

5. まとめ

①筆者が関わった「つくばセンタービル」計画の立案過程

筑波研究学園都市は，国家プロジェクトの都市建設として推進され，中心市街地の整備は，数年にわたって様々な計画の検討が行われた。特に都市計画，建築計画，施設運営計画等の検討を踏まえて市街地中心部に研究学園都市の顔となる「つくばセンタービル」の建設が位置づけられた。この施設の設計は，都市建設の計画与件に対応できる設計者を選定するプロポーザルコンペによって実施され，最終審査の結果，磯崎が特定された。施設配置の構えと存在感は，囲み空間のあるフォーラムを持つ建物として国内外に話題性を与え，所期の目的どおり筑波研究学園都市の顔の役割を果たした。

②磯崎作品を生み出した背景となる近・現代建築デザイン史

磯崎は，丹下研究室で建築と都市デザインの計画論を学び，他方，建築デザイン史の激動期に多くのアーティストとの関りを通して培われた感性を磨き上げた。バウハウスのグロピウスに代表される国際建築様式は，近代建築の巨匠たちによって建築デザインの世界を広げ，やがて現代都市を視野に入れた CIAM（シアム）の活動につながった。CIAM 以降の建築デザインは，チーム 10（チーム・テン），アーキグラム等の先駆的な建築家の活動により広まった。日本でのメタボリズムの活動は，時代感覚の先取りとなり，強いアーティスト感覚を持つ磯崎は，まさに建築デザインが変容する激動期の只中にいた。磯崎は，丹下から学んだ計画論に加え，歴史的建築と都市デザインの中にパターン（同類性）を見出す洞察力と創意を身に着け，これを高めながら時代感覚を建築作品で表現した。

③磯崎設計の建築作品鑑賞の基本的な観点

磯崎は，自己の設計作品に関して書籍等で建築論に止まらず，絵画，音楽，演劇に至る芸術論を以て解説を行っている。氏の広範で豊富な知識と様々な実体験による作品創作の裏付けは，「つくばセンタービル」を初め，「秋吉台国際芸術村」，北九州市内の4つの作品それぞれの設計意図の多様性の中に見出すことができる。以下に鑑賞の基本的観点を挙げる。

-1　存在する建物に場所性が持つストーリーを与える創意

かつて30歳で仲間たちと書き上げた「都市のデザイン」は，都市のパターン，都市のエレメント，都市のシステムからまとめられた。その観点は，その後の磯崎が設計する建築にも反映されている。建物立地の地の利を見い出すパターン（同類性）の抽出と都市イメージを構成するエレメント（基本要素）の純化，そして都市を動かす力となるシステム（機能と仕組）の再構築によって建築にストーリーを与える磯崎ならではの創意がある。

-2　都市のアイデンティティを創出

美術館や図書館のような公的な施設は，建物規模が大きくなるにつれ，都市の中での位置づけを明確にすることが求められる。磯崎は，50年以上も前から設計思想に都市景観[20]の考えを取り入れ，都市の中の建築の構え，造形や建築構造，素材や色彩等の構成要素を用い，プライオリティ（優先性）を組み立てながら総合化によって建築の表出表現を行ってきた。その結果，建築物はランドマーク（目印）となり，都市の表象としてのアイデンティティを創出することになる。

-3　存在感のある建築

磯崎が設計した「つくばセンタービル」や「北九州市立美術館」，「北九州市立中央図書館」などの建物の多くは無機質な石や金属パネルやタイルを駆使した重厚な質量感と存在感のある建築である。これらの都会的で無機質な表情の建物に加え，「北九州国際会議場」の造形性とヒューマンスケールを持つ建物は，色彩の付与により，より強い存在感を与えている。

-4　豊富な知識と豊かな感性が生む作品

磯崎の建築作品は，計画論の学びによって得た理論とアーティスト感覚によって創られる。こうした創造の力は，過去の歴史を学び，そこから得られる真意と時代の要請を総合化する創意によってもたらされている。それは，磯崎の幅広く培われた豊富な知識と豊かなアーティストとしての感性が，建築作品となって表れているといえる。

以上のような観点から，磯崎の建築のデザインは，立地の場所性からストーリーを想起し，アイデンティティを創出し，存在感と表情を持つことになる。その感性豊かな作品創出の源泉は，過去から多くを学びとる資質と，それを統合化する創意としてのアートの力にあり，それらが磯崎作品の最大の特徴といえよう。

追記

本稿は，2023年10月18日に東亜大学・秋吉台国際芸術村共同企画として第8回 日・中・韓 国際交流美術展で行われたセミナーで，筆者が発表した内容を全面的に書き替えてまとめたものである。

注

(1) 筆者が武蔵野美術大学造形学部建築学科在学中に磯崎は，専任教員として建築論の講義を担当していた。

(2) 日本建築学会賞 作品賞受賞「大分県立大分図書館」現・アートプラザ　1967年　日本建築学会

(3)「都市のデザイン」都市デザイン研究体　1961年（株）彰国社　建築雑誌『建築文化』の特集号。世界の歴史的な都市の形態をパターンとして読み解いた論考。執筆者14名の総括を当時30歳の磯崎が担当。その後1969年に『現代の都市デザイン』として刊行。

(4) 筆者が在籍した（株）日本都市総合研究所は，建築家で都市設計家の丹下健三（東京大学教授・文化勲章受賞者）研究室出身の30代の4人が創設した会社。因みに磯崎

も同じ丹下研究室出身で，この4人より7歳ほど年長である。

(5)（株）都市計画設計研究所（代表 南條道昌）及び（株）日本都市総合研究所（代表 鳥栖那智夫）が，調査・計画策定を担当。

(6)「つくばセンタービル」関連で筆者が作業班として担当した調査と計画策定業務の主な報告書は，以下の通り。

『筑波研究学園都市の中心市街地の整備に関する調査報告書（第1次）』1976年　国土庁・日本住宅公団

『筑波研究学園都市の中心市街地の整備に関する調査報告書（第2次）』1977年　日本住宅公団

『筑波研究学園都市における都心地区詳細計画樹立に関する調査報告書』1978年　国土庁

『筑波研究学園都市 学園センタービル基本計画策定に関する調査報告書』1978年　国土庁

『筑波研究学園都市の中心市街地の整備に関する調査報告書（第3次）』1979年　国土庁・日本住宅公団

『筑波研究学園都市の中心市街地の整備に関する調査報告書（第4次）』1981年　国土庁・日本住宅公団

尚，上記の第1次から第4次までの調査報告書は，「筑波研究学園都市の中心市街地の整備に関する調査委員会」（委員長：高山英華）によって進められ，調査・計画立案は，（株）都市計画設計研究所と（株）日本都市総合研究所が担当した。

(7) 1977年12月に設計予算決定，1978年にプロポーザルコンペを実施。引き続き1979年から基本設計，実施設計，1980年4月着工，1983年3月竣工。因みに1985年には筑波科学万博が，当該地区の西，4km程の場所で開催された。

(8) プロポーザルコンペは，主催者側が，施設等を設計するにふさわしいと考える設計者（人）を複数者選出し，コンペ（設計競技）への参加を依頼する方式。これに対し通常のコンペは，優れた設計案（提案）を選定する方式。筑波でのプロポーザルコンペは，日本で採用された新しい方式である。

(9) 設計調整会議は，日本住宅公団（土浦市）の会議室で毎月開催され，発注者側の日本住宅公団担当者，受注者側の磯崎新アトリエの藤江秀一，それに計画調整業務担当の4人のメンバー（参照：注（16））の参加で進められた。

(10) モダニズム建築（狭義の近代建築）とは，産業革命以降の工業化により造られた建築を広義の近代建築ととらえ，狭義の意味では鉄とコンクリートとガラスによって機能性・合理性を主張する，1920年代以降概ね戦前までの建築を意図する。

(11) CIAM（近代建築国際会議）の第8回ロンドン会議（1951年）に丹下健三，前川國男，坂倉準三が招聘され，丹下は「広島平和記念公園」の設計思想を披露し，広く知られるようになった。

(12) フランク・ロイド・ライト，ル・コルビュジエ，ミース・ファンデル・ローエ，ワルター・グロピウスは，それぞれに建築思想を持った作品を設計したことで知られている。特に1920年代以降から始まる世界規模での建築デザイン運動の始動期を牽引した建築家。

(13) メタボリズムグループは，1960年頃から建築や都市の新陳代謝（メタボリズム）を実際の建築に適用する思想を持った建築運動の団体。当時の高度経済成長と呼応し，様々な計画提案を行った。

(14) 表「磯崎新の時代背景と主な設計作品」参照

(15) アーキグラムは，1961年頃から代表のピーター・クック（フランス芸術文化勲章受賞者）やロン・ヘロンらにより新たな創作表現を伴った前衛的なイギリスの建築家グループ。磯崎は1969年，当時30代で同年代のピーター・クックから招聘され，UCLA（カリフォルニア大学ロスアンゼルス校）の建築講座を受け持った。筆者が50年以上も前，建築学科の学生であった頃，『美術手帳』に磯崎が連載した「建築

の解体 1968 年の建築情況」は，磯崎の体験を元にした前衛的な建築論評であった。

(16) 設計者説明会は，発表者の磯崎新，発注者の日本住宅公団（東京都千代田区九段下）の理事や担当者，計画調整業務を担当する（株）都市計画設計研究所代表の南條道昌・平瀬宣彦と（株）日本都市総合研究所代表の鳥栖那智夫・筆者の 4 人が同席した。筆者は非公開の議事録を担当し，当時の資料を元に本論文を執筆した。

(17) ポスト・モダニズム建築は，近代建築（モダニズム建築）の後（ポスト）の建築様式と訳されている。ポスト・モダンという用語は，『ポスト・モダニズムの建築言語』(1978 年チャールズ・ジェンクス著 竹山実訳）で知られるようになった。

(18)「地方都市からの景観創造」－秋吉台芸術村の事例を通して－地方からの景観創造講演記録　磯崎新　1996 年 12 月 9 日　主催：(社）山口県建築協会・山口県ゆとりある住生活推進協議会　尚，当講演記録は，セミナーでの筆者の卓話後，磯崎建築の理解のためにと，秋吉台国際芸術村の事業企画課 徳永貴士氏から提供された資料である。

(19) 歌舞伎で使用される背景画や大道具。

(20)「都市景観」という用語は，『外部空間の構成』(1962 年）や『街並みの美学』(1979 年）を著した芦原義信（建築家・文化勲章受賞者）によって広く知られるようになった。芦原は，武蔵野美術大学造形学部建築学科創設に際して，丹下健三を通じて 30 代になったばかりの磯崎を建築学科の専任教員に起用（1964 年）した。既に『外部空間の構成』は出版されていた頃である。

参考文献

1) 磯崎新『現代の都市デザイン』都市デザイン研究体（1969 年）（株）彰国社
2) アリソン・スミッソン著 寺田秀夫訳『チーム 10（テン）の思想』(1970 年）（株）彰国社
3) 磯崎新「建築と都市 a ＋ u」何故《手法なのか》(1972 年 1 月号）（株）エー・アンド・ユー
4) 日本建築学会『建築雑誌』筑波研究学園都市（1980 年 5 月）技報堂出版（株）
5) 磯崎新『見立ての手法』(1990 年）（株）鹿島出版会
6) 磯崎新『手法が』(1997 年）（株）鹿島出版会
7) 磯崎新『磯崎新と藤森照信のモダニズム建築談義』(2016 年）（株）六耀社

※ Okubo Hirofumi　東亜大学芸術学部教授・博士（芸術工学 九州大学）・技術士（建設部門都市及び地方計画）・1 級建築士・日本都市計画学会会員・日本建築学会会員・日本建築家協会会員・都市環境デザイン会議会員

（2023 年 12 月 15 日）

Arata Isozaki's world of architecture

Hirofumi Okubo
Department of Art and Design, Faculty of Art, University of East Asia
ok-hiro-ok@toua-u.ac.jp

Abstract

This paper was written at a seminar at the 8th Japan China Korea Art & Design Exhibition held in Mine City, Yamaguchi Prefecture in October of this year(2023), This is a compilation based on the presentation, Based on what we learned about architect Arata Isozaki's architectural design and his place in the history of architectural design, we have summarized the viewpoints and characteristics of appreciating some of the architectural works designed by him,

Keyword : Arata Isozaki, Tsukuba Science City, Tsukuba Center Building, urban design